



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10
Tajima JAPAN

門へ13
號3780
卷 8

春色戀 涂分解三編中之卷

江戸 脣月亭有人著

第十五回

朝で重の井へ赴くをあすがつあがらニ重う三三重ほど西御
きつせば仕事へつと紙入をそつとひびて打燈死
え波のわ抵と折り書きよどむる重時ふ患六むと
とかきゆきう重の井がよもあつと押へたヤイ人の床息
を考ぐて枕まじとあやぐるとアキラめび果するけす

女帝そんすみもへじうぬとひあらす被尼 宮ツルギ大さきふ
くくどろがう般良みがーの万連演ヤアそんかふくすへ
みのりヤイキキ多ハ居ねる亭主ハ氣ちう株すだんと
ゆ高ツとと諸たふやつてのふ齋へ飛ニ出テカ「キヤ 慶え
どうりきうあつてのざひます」お「どうりごこううかたりどん
ば重の井ハ盜人ぞお角トロく森はのこの和で蒲生の下
のきれどもんぢのすからむすまされとこうけんのぞ
あしかり人のおのすうか大底ふも似合ねへひつきあう自己

どうりきうすみのくもへじうぬとひあら大變が紫ある
さう「君さまですうあたれスツヘえがアアア
スクリーからんにまの井えんやへ新ふら似合ね
かそりいづかふあすんせり是が思えすやあそ
堪忍もあてあえみるゆく若ち地のよひあんぐ
どもゆつてえナまへ親方さん近の迷惑ふすくまを
まにして何ふもほりでせんきどかくするよトシが
あくさんび元珍からされとあんまりむわだふ幸

あるをうごき腰のうどじからうらぐりまふとあつて
さむるを振ひてすとおんとくたるわうら障子サト
のあよりあやーの妹モリヘエ「ヤイ待テかひとりあづみ
んやうへうそへまれへタ」モシあゆみさんをかねえ
を二階の子供をお産ちうえまつへ私さみや 妹モリ
イ弟モリ「イエ、お言いわまさんさんがかまさんへは娘むすめがおきでぬ枕
まじをまのりをお捨てふよナもうちややうの老お
めーふうりんせんサキ「ます」のヤイモリ「それでもあんまり

は「うらうら邊ハタケでりあられトあう被かぶられ面おもてからーそき
をこそゑ立たつみけれ太おほ「る遠とおて運うねぐかゆー」がこのごとの事こと
主おうは「モリ私わたしがまよ本もとな妹モリが嫁よぐまう升の重おの井いの
きんぞ不調法ふぢゅうぽでもじきうゆー」モリ忠ただ不調法ふぢゅうぽとくろか櫻さくら
グモリ「イヤサ大盜だいとう」モリ「それへれ深ふかまをぬグ何なんぞモリ笑わら
うらをうらうゆモリ「ウヤマモリ」と失抱しおむねくわが
き入いりまをねモリ名な妹モリ「まりやを表あらわしとモリとモリ作つくひでもこくへ
をん引ひきして足あしをくモリは生はと處ところりアツイはを衰こむ

くさるやお鼻あながごくねへとう小揚枝こよえがきへとうりつ時ときへかま
れへきせはけるがくへりあつうちのタナタナまの井いのが
しも失ハシ法ハシコ小揚枝コモトをさまきがサマキガ用ヨウでライをせす
あると形かたちのふくらひれにまと附アタフのなろうノヨノヨ「ハイト
遊アツハ遊アツハのうらきょんがり種シカしてぞひづる志シテ
かどそんきゆのあるウアあらねへがけきの井いのへあり此
紙シテ入スキット目メみるねニグあるものかのアヨアヨ「是シりテか
ククうひ次キミヒナてそんきのとうても重ヒビの井いのの枕カブ」

とりとみさるのの志シ「マアそんきのヨとりとくばはハエきゆうこちを
改ハシム「モシ忠ちゆうさんとやらよハシム、ませハシム枕カブ」の監カミ人の
とにきたすハシム、ナハシムるが別ハラふとくられハシムのハシムもきハシムことふ
今ハシムりみさるかハシムアはハシムれふ重ヒビの井いのの目メうびハシムりのハシムあ
るとアリオハシム、まくさんでこゑハシムへやすハシム「十三ハシム」ハシムねハシムど
きのサハシム、「まだアアどうをハシムまほハシムま旅ハシムナのひハシムア
ありやすめハシムまでア葉ハシムぐさハシムまをさハシムヤ和田ハシム根ハシムの丈
注ハシム所ハシムうふえまきうハシム志シ「ウヤまハシム」ハシム「そんきら

やるすとつむさるのうち、まくまく自己の不調法を
もえうづけ通りトあまごみては「またやアモウ去がへね
のどナ思「サーカーのえあうんぞ」味「そうちふかたとこうな
あらアホ」モ「えうあざら家を庭で施匠の盜人
のとりえりをアホー、うち家業の邪ア、ふきうやすもの
金うき着のえねえトの後、じろの障子をあけ
サアコソヒマリヒ大人を仲の附近にまき出さにトウキ
リテス六ノハクの忠六を立ツて妻の育ヘトシモ

近邊次女と隊を湯へ又うつ莧示とお笑うと「ヨレサ
あわうん仰のふもそんみお葬礼お丈ア及む、仰もも自己
が猶未あうう必ずくよく思うて縷と出」てくんナさんナ
もおう夜間小室もだう人れと萬付て麻うぐつへ
寛小面目うゞんまが是あひ多く「コニサク」、之を
あれ「うしち」自已が承かざう吹う若勞とせをみ卑く森ナト
云捨てとを承りタとまの井口をあ、擦くこの肉小
ありトテうおんへん人の身ふあううあう、我心

章より乍らのがまといひとて後を憂ふからうござり現ざい
産とのあ取も何不ふとくとてござんもうよーおま
とをお教もあくまでおこね中でもおとみへ一ト方多くね
あらぐくノアノ米町を出でまつりそやうとゆ今抱
子のほえつる扇りしゆく今の比身ふたうじせきて定
一食をひとおりよ甲斐をくいまはなれせふと人と
成りよお父よさんハ象々發變お初とておうひと
ちうきよ
太六ちの咲一木中生くぬとくとへあたそびと竹の

いちども向もせずこよくがさきばかとお親方さんのおもろ
くらゑんおもかまづかむきーとくはやいの強肴えつる
ひふ達ひいのれのせ非セ利ヲ曲うての山お野恩多
さも人びに蟹すくゑふれうそ十ナグ一つのかんかう
蟹すくゑのうイヤくじくする恩優のあればこそ様ふく
るのゆうを
従ふとうと倒れてひと病へとあへられふひたる名ふく
蟹すくゑふ雲とすまくあわわとああ浮あがむ

かを失はよくめぬう子ひつも漏れ一とされゆるあれば送り出
す藤むき本目尻こするまへ別せからぬと秋のまも
み己惚ゆうあするうちふかの利も衰すりと向
比鉢を嘗みきら喰うふ菓子軍志やれハ踊ろうと
翁がさうの男は子年また十キ年もあざるとがれ
野うふ翁貞うて詫わうじと二度とうつよておひされ
いの度に多參まち波、きんぐりのび立つて床モ中
じん千ヨイトノアノ鉢をうるふとほじがえきヨ。ヨナ

翁ヨリ中モせ活一ねへ今よびまさア子まつまやぐくあ
やうり子傍中庵に遠へ来てうえの縁ふことかほじ
子ナア何れも波山實そかれを替りうごでモ踊ぐも
サアますさら床キヨイトモラ波さんかきうとのよ正寔ホ
老の子トサウマムんのから人幾歳ふうと人子
坊へもてかと躍出一して又せる波キマアセワふ未
ちやア大きいねサアれイグ百羽サから大きふと人子
うんぞうとや子アイそんから我わの習うととやう

キヤマアちくらすとうさんざよ

我の

「おまえが君の身のまわりをやせ
おまえの身のまわりをやせれ勇夫いさむおまえが身
をどもよこまわらひのまへばやうづどうぞ

うつておきへぬ

「あくまへどすいづ実じみふけを子こざねく私わたくし
冥めいくらもつとすり床ゆかま取とるそんまよア新しんあら風かぜきの井いのい
さんさんヶふそりく跡あとかおぞうすうらふすとれて

のうてうんせうひとせうりがーへまびうすくまう「丈じょうへ
まよびくすよ二階ふたはうへ連つづてがりたすかうどんうすはう
ざくまきう「さうひとせうもねくどうもあせう床ゆか「さつ
みと考かんえく役まきさんとくるを棄きそんふれへは東合とうごう内うち籠くわいと
次つぎ邊べんがうとんふくうひとて莫ばくシせう「ア史しがよとざる
すきうーと役まき定じょうトゆゆあくう名なやいあるへんへ床ゆか「ゆか
うき支さあんぐよと云いやいあくくあくくやいあくくへ
サアア子こやいりと能のわいと次つぎひおうのとくらへあぐなほ

ちくまざいますね、佐助さんへ「えす、本」まさ
原でもうんでもありますへんぐ子の足を洗つてやうてが異
んなまよ、ナ子「ナニよ、ごめんます自己を人であります
から、佐助さんへあれがあらうてやうからあつとーそびナトヨリトハセ
子、またふあづよ、本「アキ琴そんね、ヤアかわのどくざみ
ますげんへりうてがのりんふさうのうてがうんナほサア子やう
あへあなよ「すゞかのうんの対面へつれてゆくのもきみうき
うきうきすうりゆーの西へ流れてうすがうんナホナ本」

あへとうでりよ、さひまきアヌ「そりとうれうかーうんー、
本「何れも「もし歎さんのお連へが出来」ナ本「アラ、うに
んせうは、うま琴、彼のま琴の対面へひそく隣子のえ
とおり、アカヒラン、じわんかほ、重「きてごとそんか遠
いがさ」ナ、「モヤんまおお勢さます一すもーのそ
の隣家近来てが決うじ面白いあわせ来る子がきく
そりうく、鳴喰をやうそおどくうひんすが喰へてし
うちうでがどうへあそびでどんたまおううううを

うきのうがよきひますぐを解あくすみとつれこのでや
まかわくふくものも西目のよきんすま「きのよへぬみをあい
うんもやふそんかねあるうきのうだれもあうてのを
ね西寔ホアツシ小代にい奴ワジヤアトマスルウモ智り
かくさんかゑんかうく容ふあすひとくさす一々うる
さくさつとよびひますねア急も角も末てあきらし
ヨリ「経宥ざくに舛けれど兼さんや政さんふお目ふか
るものろぐるうきんモキ「ナニかまだん政さんも兼え

も秋がりてからあそんですから何シキもあうやアあま
えへあはきうらへつああうらく人連て來ませうり
と呼一まふ砂の戸が障子の和より「アキ琴うえ今
るを述べてきまつて「キカムヒひますくよしつれ
てあひそんへて枝

第十六回

「どうぞすからじん様子でせうね」「うかどり子がねや
サア子や今のはうさんとんとんナホ「サア子くやんかヨナセえ

おふれんでつるのびーと今私きの村番でさうたどゆ
きく三「まごもさうれからほりまづらり網ぐらう
てのけりひのチサ「丈トやア砂糖湯とくらべてあがま
モサ「くふん不堪スル」とせんナは可クむさうふぢれく、
私フきくうんぞシテアリとやうう毛子ウタキ佐サえま縫シそんとよびや
今縫シそんへ縫シと縫シワシがりせんシうんで用シ
ら私フきくまさうかシうじシ「さういりますすまトマタ子ハ」シことり
たこの遠カい柳カツラの葉子ハさんすをとうてうんシじてあ

つうてま縫シそんシの君令の車カミキをこもれずふあくとさううれ
合ハグ「アイア」サアアア子コやれとシま「マアからうん丈シヤウの久食
ちシもサシうんぞシテひシ三「それもさうれもシく實シて仕事シそ
寅シニうすもあシうのシのチサ「丈トやアうんぞシ誦シ」「そ強シ性
子ハあシ実シをせばハットシうのシ度シ手シ「ま珍シそんじどりと
が成シるねシ「可ク毛シうふ實シふやくあシいヨナシはまく
きシのトシうきシのヨシが良シて食シられシ夜飯ゲンで終シと拭シあシよ
よ紙シとあシよシ可ク毛シうふ實シふやくあシいヨナシはまく

おまへの定へ何和がますえ
三　おまへの定へ浜崎町
せうすくまらまうとておとさんやくほりどさすが候
ところて私らの姓（さなな）一がーのうち姓（うぶな）つをかう鹿（しか）ノ子
アイケーこましとあそんからひりんまで今社よりぞや
ま一西実人をめうもんへれが這うさんモヨシにてアイケヤ奈
（もやもそせ）みかううとせたる洞押（くぼう）一ひこうはく
かうくくふのまひあらねどもゆは旅賣の切ふの同
こきうにえあらまじとまー二吉ふねをもからう生うぐー

えのよりくヌツの附せせを云りとまくさんへ我あくあくほく
れもよまとせまくとがりぐ流石筋（さな）戸の筋（すじ）をゆき
やせんと力（ちから）けするかのちとまとまの一つのとが半
夕あらんげ子とまをあくてもちひかー見（み）まざる
の客人はかりうんすが正實（まさね）うさんうふまく注あくえん
さくよ子の為（ため）うすくすまひりユウタラうづらひま
一うれあらやア今ふまよ四さんトキテゲに戸一坐てが足
立（たて）てもあわるやも出まんせんらむとうきくとかも

色いろわ角くづやカがお聲こゑでぞうもおのぞくすくら毛け晴はるら
ふとかりつたのかあきてるひ出す程かずとうへよた是れゆだ
の子こやあんかみみからうんうんかままでぞうもおのぞくすくら後ご
生まとちつて何なにぞあり久ひのとくいナヨヨ三ミアイ今いま唄うたひ并そなへ
ゲテまままへえんえんまま毛け島しまが魚いわひのうら私わたくしイイきすく
あまままううううううううかかをさんをさんへ正まことに實じの慈母めいぼさんさんのやう
おまむれむれてううううううううううううううううてまで唄うたむうううの
でままますううううううささき腹はらとお立たつの妹いもさんさんふどうどうぞおお

えんえんららあやままてかうんかうんまま「えんえんままかままの慈母めいぼ」
ままの慈母めいぼトトかうんかうんの入い三ミアアキキ「ままじじ人ひと親父おとうさんさんへ正まことに實じ
久く三ミアアキキ洞ほぐぐててアアリリからんからんを渡わたりりて來くまま
ららゆゆくくととかか呼よーーききととかかんかんききして築つきの戸戸へろろうう
の前まへへぞぞりぬぬたた重じゆの井いへ彼かれの三ミ吉よしととひひままああとと人ひとをを
ててももおおべべひひててわわ云いひひやや「ままじじととままのああととさんさんやや慈母めいぼ
ええへへせせ去いぐぐかかの入い三ミアアキキまま私わたくし時ときかつかままえ
へ遠とイと田た舎舎へりりてて仕し舞まいかかううさんさんももをを復おりりとと遠とイ

因會いつうたやゑかたすきんふをとへられまつて、アガニ實のあつ
キヤさんのはるうちハ夜飯も沢ひきをしてれど味イリのす
実てシれや、朝がさればか目見と異ちと氣息がまき
ても藥を呑せむ氣のと否ナリタとすくさむりでかそ
えふうてからみ三度のか飯のすす御ハ諾モツラ
す秋中ふ小便ふけくつとも一不ふりうてうれきへやヘツヒ
ら秋懐一て床小はすすれば翌日の就きゆゑづされまつて
絞ねられまくあんをひぐまのうりとも葉のまさそくねせす

余處の子供へか正月やが音もへあひりての夜飯をとへられたと
私イ年へ右イのとあそひつらもこながきてアドヤムシびす
かアヨシがきくべ私も旅夜飯若せて費らうゆのト決て
もつうに居りますと寝る子さるはぬのむねハ旅館半分で
あう様るゝひ泣やうてまきをほんのうひとあひとあう
う左派してまさら、サア東の空氣をまくわに櫻うれて
ぬく度ノキモ庭へあれすかふれがたへくられおのトへ事も
あればあつちがと云つてざれ車のよひをう蓋せし

井戸のとくねうしんみの内をの井 三まくら今うの居安ひろされ
ひともうあすまわすもとすむら水汲むきりひるへき
れ秋へまくらの内でも足乃ゑる痛楚を被るもぐれ
や衣をうて森られへせず居眠つすればぢへすざれ
ゆれもえんみ私イの仕事のまことにせんうすきとつ
けすもあつかアのまえりりす毎日毎晩ざれるのと隣の
かをえんぐみびんづく便をうしむせかとうとかト衣を
くして吉永あやや菜子とうふめうとかへ

られく四八日むらは假穴へおますなれども三まくらが
買ツてれるや名ははづかつらヤさんも機嫌がよつてむより
うれいにそれふびけもふ室の長母さんへの和子と見て
かひぐたうどうそいちばあくとく洞穿らみのぐるを
きく毎ふびんさとまくきつうきゆすく「も
ざく今ねきのゆ率をよくすまくヨモのくま
のからうの義母もぐんせあふよくとくいぬ
がとりゆづよくみ率をやあらううらううらす



お見えの姫母ごとおひなますナヨチ 三「ナニ忽御きへども
うるまく思ひませう金石の子がふくあとか湯へ往ツ
うえんかん候へ往つあうするのをゑびじふ私ノモ正實
の無事がわざあくよやうふれ和へげもまざひれて
がゆさよく達者で田舎うちへつてからできらうれ
うれうれすくえつて来きのあらむやねイが大き
くうつておこさがへておがたうめんじることもあう
うらうらいがたきくある邊へ何處かひいで旅るともどうで

をみてるやうお毎日候へといます ま「可憐りきと
とのうけてあはきまくされけるがせあくて ま「サリキ
かつうアさんのがえさんへこひどんかく嬌へうさん
さうあうへくま人のかつうアくまうひもとうもあー
であるまのうらうきす案トテさんみ愁くがまく爲
ねずとも今ふ立れかへくむうひもあるもあとき
うらうきうきやうへくみの絶母セ西実のちうア
ごとあうて大車カタマリをもんへ産との就より育られた第

の方が大草がますすら能の考かりを空そこねくササみ
きうぬを拭ぬくすくらええままととままくくののみみ三三
做おるよりみみけれともええんおうかかままばば西に東ひののああ
かかののややススおおれれててぐぐののがが聲こゑたま「ままくくええんんまま車くるま
ををおおそそせせううすすららききののつつ逃なももむむささううめめのの今日きははままくくくくねねいいすすすすいいくく
ままややののぞぞあるあううべべつつででももええそそくくままくく
おおれれううくく「い」い經き有うトト屋やくくすすれれああららきき

ととももとと「ア」アままちちややトトののすすぐぐ用うだんすすのの」ハ
ちち金きづづくくのの一一ももううままかかららぎぎすすららす
家くままええんんええ「ア」アれれへへー一年ねんぎぎすすく完まへへてて
做おりりててああつかつかふふかかげげくく「ア」アううぐぐううももすすまます
クク衣き母おええでもどももいい人じふふかか今いまととららうう愛あいへへききいいてて
そそううすす投なげてて一一足あし從なてて立たつ處ところニニ足あし也よ又また立たつ
重お井いののの教おととおおううとと名なめめ也よれれ不ふセせトとととけけ
わわううののととととぞぞととせせとと「ア」ア居ゐ游ゆやや「ア」アイイトトののそそく

重の井の森へ來れどもまひだま可憐の日のもとび
ゆみをそ一すきごふうれわるおふらふたのそとーく
アーフからんを海モアイト返着すきく新とれぞの袖
とて拭ふきベーはんま四編を解て是より下の毫ヘ分
与四布エグオのうへすりうる

春色戀染分解三編中の巻終

